

新しい視点で音楽科授業を創るヒント

北海道師範塾「教師の道」

副塾頭 小山内 仁

(北斗市立石別中学校教頭)

1. はじめに

平成 24 年度、学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）が義務教育全体で全面実施された。全国的にその趣旨を生かした実践が着実に進みつつあるが、更に質的充実を図るためには、全ての音楽教育関係者が新教育課程を十分に理解し、指導と評価の改善に努めることが求められている。

学習指導要領は、教育基本法や学校教育法の改正等で規定された教育理念を踏まえ、今日的課題に対応するように目標、内容等を示している。

音楽科・芸術科音楽では、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活との関わりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むことを重視している。

学校教育において、このような力を育むために大切となるのは子ども同士が協同的に音楽活動に取り組むことである。音楽の学習は、ともに学ぶ仲間、認め合う仲間がいてこそ高まる。音楽を形づくっている要素の知覚・感受に基づいて、一人一人が自分の考えをもち、それを音や言葉などで仲間に伝え合いながら音楽表現を工夫し、音や音楽を通して自分と仲間とのつながりを実感できたとき、表現することが意味のある学習となり、真に音楽表現する喜びを味わうことになる。

2. キーワードとなる「知覚・感受」

楽曲のよさなどについて自分の考えをもち、互いの考えを言葉等で伝え合いながら楽曲の価値を見出したとき、音楽を聴くことが意味のある学習となり、真に音楽を聴く喜びを高めることになる。

特に、指導のねらいや手立てを明確にして、感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視することによって目標の実現を図っていくことが基本的な特徴と言える。

そのために〔共通事項〕を新設し、音楽を形づくっている要素の知覚・感受（＝音楽的な感受）を全ての音楽活動に共通する指導内容として示されている。

このことは、美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取ることができる力の育成に結びつくものであり、調和のとれた人間形成に欠かすことはできない。

この音楽的な感受を支えとし、表現領域では「演奏によって自分は何を表したいか、そのためにどのように表したらよいか」を思考・判断・表現する力を育み、多様な音楽のよさや美しさなどを主体的、創造的に味わって聴く力を高めることが重要である。さらに、音楽から喚起される感情やイメージ、それらの変化を意識して、自分とは異なる他者の感情などにも共感し、音のコミュニケーションを図りながら相互理解を深めていくことも音楽活動の特徴である。

思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成することと、音楽と生活のかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むことを、音楽科の改善の基本方針（20 年 1 月中教審答申）の中心として指導要領改訂が行われた。

3. 音楽科の「確かな力」を高める

音楽の授業で子どもたちが「わかった」「できた」という実感をもつということは、子どもたち一人一人が感性を豊かに働かせながら主体的に音楽の学習に取り組んでいくことである。そのことを通して、子どもたちが思いや意図をもって表現したり、価値判断して聴いたりすることができるようになることが大事である。

そのためには、指導内容を単なる知識として理解させたり、技能の訓練を繰り返したりするのではない。子ども一人一人が音楽から気づいたことや感じ取ったことをもとに、歌ったり聴き深めたりして、その音楽を形づくっている要素の働きをとらえる。それを手がかりに音楽表現を工夫したり、互いの感じ方の根拠を共有したり、また、音楽に対する自分なりの解釈を導き出したりできるような授業へと改善していくことが求められる。

知覚した内容と感受した内容を関連付け、それを支えとして音楽のよさや美しさを実感し、思考・判断・表現する「音楽の確かな力」を子どもたち一人一人が高めていけるようにしたい。

4. 音楽の美しさを味わう

音楽によって、美しいものを美しいと感じる心豊かな子どもたちを育ていくためには、多様な音楽を幅広く直接体験する機会を大切にすることである。授業の中で、曲の面白さや美しさへの気づき、音楽を味わって聴いたり表現したりする活動をより多く取り入れることが必要であると考えられる。

前述の「確かな力」によって、音楽のよさや美しさがどこから感じられるのかを、仲間と語り合ったり、実際に表現や鑑賞で確かめ合ったりすることが求められる。さらに、一人一人の感じ方や表現の仕方の違いを認め合ったりすることによって、音楽そのもののもつ価値にふれ、なおいっそうより楽しく豊かに音楽を表現したり鑑賞したりすることができるようになっていく。このように、教材研究を深めることで、子どもたちの音楽に対する豊かな感性を育てていくことにつながる。

5. 新しい視点で音楽科授業を創る

自分の思いを表現できる力の育成は、音楽学習活動のもっとも中心的で、第一に目指さなくてはならない力である。しかしながら、未だに教師主導型の学習活動が展開されている。これでは、子どもに「思いや意図」をもたせたり、「味わって聴いたり」させることは不可能であろう。

自分の思いを表現できる力を育成するには、自分にとって音楽とはどのような価値があるのかを見出させる必要がある。そのためには、音や音楽を「知覚・感受」する力、すなわち「音楽的感受」の力を身に付けさせなければならないと考える。このことは何年も前から言われていることであるが、実際の授業においてはなかなか達成できていないという現状がある。

音楽科の授業では、子どもたちに何を学ばせ、何を身に付けさせ、何を育むのか、教科の存在意義にも立ち還った実践と検証を深め、教科の理念が反映されるような授業研究を積み重ね、新しい視点への転換が今後の音楽科へ求められている。

参考文献

J. L. マーセル、美田節子訳『音楽教育と人間形成』（音楽之友社：1967）